
ただ、それだけを知りたい

カーテンコール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただ、それだけを知りたい

【NZコード】

N4776Z

【作者名】

カーテンコール

【あらすじ】

土砂崩れで死んだ、1人の青年。異世界へと生まれ変わった彼であるが、再び与えられたその命には、大きな制限が掛けられている。運命に翻弄される彼に、果たして『救い』はあるのだろうか…。

終わらない、絶望への序曲

人は、桜が如く。

ただひと時咲いては散り、後に残るは醜い枯れ木のみ。

……これは一体、誰の言葉だつたろうか。

「最悪、だな」

過剰なほどに整備された白い建物を見上げながら、そんな台詞が口を衝いて出た。

こんなに氣分が悪いのは、生まれ変わった初日と『あの日』以来。

……俺は、死人だ。正確には、一度死んで再び生まれた身だ。

輪廻転生。元は仏教だか密教だかの用語らしいけど、生憎俺は前世も現世も無神論者だから、詳しくは知らない。

けどとにかく、その転生とやらを経た人間であることは間違いないと思つてゐる。

忘れもしない。あの日、土砂崩れに巻き込まれて死んだ前世。

それから碌な間さえ置かず、再び赤ん坊になった。

「あれから、15年と少々」

容姿も変わつた。

在り方も変わつた。

変わらなかつたものなんて、見付かりそうにないくらい変わつた。

俺も……世界も。

「インフィニット・ストラトス……」

通称「IS」とも呼ばれる、大気圏外長期活動用マルチフォーム・システム。

……などとは名ばかりの、危険極まりない兵器。その圧倒的技術

力により作られた、云わば時代を先取りしすぎた存在。

そして俺の、全てを狂わせた災厄^{ヤハ}。

「ちいっ」

舌打ちのひとつもしたくなる。

ISさえ無ければ、俺のこの第2の人生が狂う事は無かった。

神など信じていないこの身だけれど、もし居るとするなら住処まで乗り込んで、殺してやりたい。

ややこしい真似をしてくれた、死んで詫びろと声高に叫びたい。

お陰で俺は 否。

居もしない存在に文句を言つたところで、壁に怒鳴ると同じだ。

そんな無駄な事、してもしちゃうがない。

結局のところ、俺のこの非力な腕では何も出来ないのだから。

「…………」

分かり切つていてる。

俺に出来る事なんて、何も無いってぐらい。

「…………時間だ」

腕時計の短針が、そろそろ8を刻もうとしていた。

もう行かないと 初授業に遅れてしまう。

俺はひとつため息を吐いて。

先程から見上げていた建物……『エバ学園』に向けて、足を踏み出した。

「最悪、だな」

最後にもう一度、同じ言葉を呟いて。

6月終盤。

ここEIS学園では中止という形にしろ、つい先日大きなイベントであった学年別トーナメントも終わり、更に1年生は臨海学校が目と鼻の先となつた時節。

しかして今日の日は、何事も無く過ぎ去る、いへ普通の日。

その筈だった。

「転校生？ また？」

1年1組の教室。

そこで俺は、何故か待ち構えていた鈴に捕まり、『転校生』の話題を聞かされていた。

「そうよ。うちのクラスがその話題で持ち切りで、うるさいから逃げてきちゃった」

「フン、白々しい……」

何故か不機嫌な筈。一体どうした、カルシウム不足か？

煮干し食え。

「……一夏。何か今失礼なことを考えなかつたか？」

「いやそんなまさか」

危ねえ。心を読まれた。

「けど、やつぱり1組なのかな？」

そう言つたのは、つい先日『シャルル』から『シャルロット』として再転入した友人。

鈴の話からすると、そつらしい。また山田先生の睡眠時間が削られそうだ。

「しかし、転校生か。もしかして男だつたりしてな」

「それこそ有り得んだろ? 男のIIS操縦者は、お前と……」

ちらりと、教室の一 角を一瞥する鈴。

そこには、ラウラとセシリ亞を相手に話しかけているもう一人の『男子生徒』が居た。

「あの下衆だけだ」

「下衆つて……そりや言ひ過ぎだぞ鈴」

「あのよつな輩、下衆で十分だ。見られるだけで虫唾が走る」

ブイツと顔を背ける鈴。余程あいつが嫌いらしい。

鈴だけじゃない。鈴は頷いて肯定してゐるし、シャルロットも苦笑

はすれど否定はしない。

……ついでに言えば、あいつに話しかけられてるワウワウセシリアも、思いつきり不機嫌を露わにしてる。

それでも必死になつて話しかけるあいつが、何だか可哀想になつてきた。

よし。ソレはクラスメイトにして唯一の同性である俺が、さうげないフォローを

「お前達！ ホームルームだ、さつさと席に着け！」

しょつと思つたところで、千冬姉が出席簿片手に教室に入つてきた。すまん、無理だつた。

刹那、『イグレッシュン・フォースト瞬時加速』さながらの速さで席に戻るクラスメイト達。すげえ。

鈴も以前の恐怖からか、いつの間にか消えてた。

「ふん、やればできるじゃないか。では山田先生、頼んだ」

「……あ、はい……分かりましたあ……」

こつものようにバトンタッチされた山田先生から、こつもと違つ

て魂が抜けていた。やっぱり睡眠時間削られてたらしい。

「ええっと……知ってる人はもう知ってると思いますけど……ホールームの前に、転校生を紹介したいと思います……もひほんと勘弁してください、私の睡眠時間が、ああああ……」

今にも処理落ちしそうだ。惨い。

「転校生だとー?」

パン、と立ち上がる音。

振り返つたら、後ろの席であいつ……銀崎が驚いた風に山田先生を見てた。

てか、あいつ知らなかつたんだ。

ラウラとシャルロット、それに鈴の時は凄い詳しく知つてたから、そういうた情報に関しては通だと思つてたけど

「席に着け、銀崎」

「つと……すいません、織斑先生」

千冬姉に睨まれて、座り直す銀崎。

けどその顔には、未だ疑問の表情がありありと出でていた。

「（しかし本当に一組だったな。もう今更だけど、本当に分散させないでいいのか？）」

至極まつとうな事を考えていたら、教室の扉が開かれた。

あれ、何かこのパターン前にもあつた気がする。

「.....」

無言の入場。あ、これも前にあつたパターンだ。

よし、『P・ラウフ^{パターン}』と名付けよ。今決めた。

うんうん、俺つて結構センスあるんじゃないかな？

「.....」

そんな下らない事を考えていたら、ふと教室のざわめきが消えて
いる事に気付いた。

何だ？ 今度は『P・シャルル』か？

「…………へ？」

考えながら、転校生の姿を見遣つて。

思わず声が出た。

ざわめきが収まる訳だ。何故なり。

その転校生が 俺が半ば冗談で言つた通り、『男』だったのだ
から。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4776z/>

ただ、それだけを知りたい

2011年12月16日17時56分発行